

マーシャル・I・ゴールドマン（鈴木博信訳）

『強奪されたロシア経済』

（NHK 出版、2003 年）**

ソ連崩壊とは一体なんだったのか。1991 年 12 月、CIS（独立国家共同体）の成立によってソ連が音を立てるように崩れてから今年で 15 年目。今、世界は冷戦の残した遺産が予想以上に大きなものであったことに気づき、歴史を振り返ることで現在の問題を解決しようとしている。一方、ロシアに暮らす多くの国民もまた、共産主義時代の生活を懐かしむノスタルジックな思いを胸に募らせ、自分たちがなぜこうなってしまったのか、今度はどこへ行こうとしているのか、恐怖とも諦めともつかない感情を抱えながら日々暮らしている。

このような数々の問いに答えるべく著されたのが本書、『強奪されたロシア経済』である。著者のゴールドマンはロシア政治・経済研究における世界的権威であり、大学で教えるかたわら新聞やテレビなどのメディアにも盛んに登場し、学識とジャーナリストのセンスを合わせもつ大家として有名だ。本書も、膨大な文献資料とともにソ連やロシアの高級官僚、オリガルヒ、工場の企業長を含む 90 人以上の人物のインタビュー、会話、セミナーでの発表などを盛り込んだ幅広い観点からの分析となっている。

著者はソ連の産業が新生ロシアに受け継がれる過程で起こったことを、単なる「私有化」「民営化」ではなく強奪行為だったと述べ、その経過を見事に説明している。現在のロシアでは、オリガルヒと呼ばれる新興財閥が集中的に富を掌握し、彼ら少数の億万長者がますます金持ちになっていく一方で、生きていくのが精一杯の貧困層が

国民の 3 分の 1 も存在する。こういった状況は紛れもなく共産主義の終焉によって生み出されたものだが、著者は共産主義時代に形成された経済・政治・社会的条件を理解するためには、帝政ロシアの時代までさかのぼる必要があるという。

帝政ロシア時代にも資本主義は成熟していたわけではなく、ロシア人は資本主義が何たるか知らぬまま 70 年間にわたる計画経済を生きてきた。さらにロシアで商人として金儲けをすることはいつでも貪欲で粗野で搾取的な行為と見なされてきたため、1987 年にゴルバチョフが少しずつ自由市場での取引を認めようとした時も、ロシア人はこれを「毘だ」と考えて積極的に動かなかった。ロシア人にはビジネスに対するセンスが備わっていなかったことをゴールドマンは重視している。そしてビジネスにふさわしい基準と制度をロシアに取り入れることは容易ではないし、また、質の違う外国のビジネス・コードを移植しても、そのまま採用できるとは考えられないと述べる。規範やアイデンティティを重視する文化主義アプローチは、ともすれば問題を抽象的概念に起因させてしまいがちであるが、ゴールドマンは実際に行われた改革過程の手順や利害関係、ソ連（およびロシア）経済の客観的状況を勘案することも忘れない。

そもそも、冷戦末期のソ連経済はすでに破綻をきたしていた。ゴールドマンはこれらをジョウゼフ・バーリナーが例えた「馬」（初期条件）という言葉で表し、「確かに馬は具合が悪かった」と述べる。しかし、そ

*同志社大学大学院社会学研究科博士前期課程

** ISBN : 4140808195

れに加えて問題だったのは、70年の共産主義体制を経たロシアには、自分の頭で考えることのできる有能で経験に富んだ「騎手」（指導者・改革者）がおらず、これが改革を一層困難なものにしてしまったことだという。新生ロシアで改革を担当したアナトーリー・チュバイスやイゴール・ガイダール、そしてアドバイスをした西側の経済専門家が「当時としてはああするしかなかった」というのに対し、著者は「よりよい方法がなかったとはいわせない」（第10章）と、私有化が比較的成功しているポーランドなどの例を挙げてロシアの問題点を分析する。

事実ゴールドマンの指摘するように、ソ連時代には企業や資源、土地などすべてが国民全体で共有されているという建前であったため、それらを売却する場合は全国民がそれぞれ利益を享受するのが当然である。しかしながら現実には、管理を任されていただけの企業長がタダ同然の値段で会社を自分のものにし、資源や土地に関しても懇意の政治家に許されたごく一部の者が奪い取っていったのだ。彼らが安値で手にした資産は、国際的に見ても莫大な価値あるものが多い。というのも、ロシアには膨大な量の天然資源が存在しているからである。興味深いことに、著者はロシアの豊富な資源を「改革の阻害要因」と述べている。これらの資源を強奪したからこそ、オリガルヒは何一つ新しいビジネスを生み出すこともなく、また要領のいい方法を見つけることもなく、何かを発明・発見することもなく莫大な富を築くことができたのである。

その意味でいえば、オリガルヒの中で珍しく新しい企業を作り出したウラジーミル・グシンスキーは注目される。グシンスキーは新聞社やテレビ局を設立し、最盛期にはいくつかのメディアを所有する複合企業を形成していた。しかしながらチェチェン戦争や原子力潜水艦クルスク沈没の際、プーチン大統領に対する批判を行ったことで様々な圧力を受け、ついには横領の容疑で逮捕されるに至る。他のオリガルヒもほとんどの者がメディア企業を（強奪したことによって）所有しているが、彼らは政権批判をやりすぎるとグシンスキーのようになることを知っている。プーチンは彼よりも少しは寛容だったエリツィンと違い、自身の政権を揺るがす恐れのある者を容赦なく取り締まっているのだ。例えば現在のロシアでは、チェチェン政策に関して批判的な言説やそれを想起させる事実は一切報道を許されず、出版禁止になる書物も後を絶たない。国民の自由な言論が許されない限り、不正を指摘することも社会を改善していくことも難しいだろう。

貧困にあえぐ多くのロシア国民は、共産主義時代をより一層懐かしむようになっていく。少なくともソ連の暴君は人民の面倒を見て（監視して）いたが、現在のロシアはヴィヴィアンヌ・フォレストルが『経済の恐怖』で語ったように、「もはや人間は搾取の対象でさえなくなった。いまや人間は排除の対象になった」という言葉がぴたりである。ゴールドマンはロシア人を、皇帝にせよ共産党にせよ、そして大統領にせよ、権力者の抑圧に慣れた忍耐強い人々

だと捉えている。しかし、彼らは爆発的に革命を起こしてきた歴史の持ち主であり、ロシアで変化が起きるとなると、漸進的であったためしがないことも付言する。そして、同じことが再び起こらないとも限らないと警鐘を鳴らしている。

では今日のロシアにおける悲劇的な状況をどのようにしたら打開できるのだろうか。当然といえば当然であるが、著者はこれに対してあまり効果的な処方箋を提示しているようには見えない。現状は何をどこからどうすればいいかわからないほどひどいものなのだ。著者が提言するのは、ソ連解体時に不当に利益を得たものに正当な代価を支払わせ、被害を受けた人々に償いをさせること、ロシア政府がまだ所有している国有企業を今度こそ国民が等しく利益を得られるような形で私営化すること、そしてそれら改革の実現のために、ロシア社会の底を流れる不正なカルチャーを変革することなどである。困難は承知であるが、国際社会が安心して投資できる環境を整備できないことは、ロシアにとっても不利だということを著者は説明している。

しかし現在のところ、ロシアが自らを省みる気配は全くない。膨大なエネルギー資源と軍需産業にものをいわせ、外国からの関与に対してますます強権的態度を見せているのが現状だ。その姿勢はチェチェン政策や国内 NGO の取り締まり強化を見ても明らかである。他国が干渉しすぎることは望ましくないが、もはやロシア政府の自浄努力や国民が声を上げるのを待つばかりではいられないだろう。他国はロシアに対し

てどのようにアプローチできるのか、どのような仕方が望ましいのかという視点が本書でもう少し論じられておれば、なお広い視点を提示することができたと思う。しかしながら、本書が現代ロシアを理解する上で、さらにはグローバルな政治・経済秩序を理解する上で、本質的構造を照らし出す有益な一冊であることは間違いがない。